

感謝台湾

—台湾の皆さんへ感謝を伝える台湾一周自転車の旅

日本台湾交流協会台北事務所 広報文化部主任 大内洸太



1. はじめに

東日本大震災から15年の節目となる今年3月、震災時に台湾の方々からいただいた大きな支援への感謝を、自転車で台湾を一周する「環島」を通じて伝える旅「感謝台湾—震災15年 環島之旅」が実施された。団長の一青妙さん（著書『「環島」ぐるっと台湾一周の旅』ほか）の呼びかけで集まった有志33名の一人として、筆者も「環島」に挑戦した。

台湾駐在期間中の「やりたいことリスト」に「自転車での環島」は以前から入っていたものの、なかなか踏み出せずにいた。そんな折、ジャーナリストで大東文化大学社会学部の野嶋剛先生から本企画へのお誘いをいただいた。筆者自身、福島県出身であり、震災発生時には学生ボランティアとして石巻や気仙沼などの被災地で活動したこともあって、東日本大震災は決して他人事ではない。台湾の皆さんから大きな支援を頂いたことは今でも記憶に新しく、ぜひ参加したいと手を挙げた。

とはいえ長距離ライドの経験はゼロ。日頃は台北市内でシェアサイクルを使い30分以内の移動をする程度。そこで「途中でリタイアしない」ことを最優先に、電動アシスト付き自転車をレンタルして臨むことにした。もちろんバイクとは違い自分の脚でしっかり漕ぐ必要があるため、出発前の1カ月は移動を極力自転車に切り替えるなどして脚づくりに努めた。また、身につけるものはヘルメット以外は自前だったため、この旅に合わせて必要な装備を一通り揃えた。

本企画は3月7日から15日までの9日間で、台湾一周約870kmを順時計回りで走破するもの（ちなみに自転車での環島では反時計回りが一般的であるが、本企画では3月11日に高雄で実施するイベントに合わせて順時計回りとなっている）。単なるロングライドにとどまらず、道中には各地での交流イベントも盛り込まれていた。行程は次のとおりである。

DAY	起点	終点	距離(km)	イベント
1	台北	礁溪（宜蘭県）	74	出発式
2	礁溪（宜蘭県）	瑞穂（花蓮県）	78	（礁溪駅から花蓮駅は列車移動）
3	瑞穂（花蓮県）	台東	115	台東県政府表敬
4	台東	枋寮（屏東県）	120	介達小学校訪問
5	枋寮（屏東県）	高雄	68	感謝台湾・日台友好のタペ
6	高雄	嘉義	130	台南市政府表敬
7	嘉義	台中	102	
8	台中	新竹	97	ジャイアント本社表敬
9	新竹	台北	87	

今回の環島は、一青妙さん、野嶋剛先生ら日本人有志の企画のもと、ジャイアント・アドベンチャー社のツアーとして実施され、同社が全行程をコーディネートした。スタッフの皆さんは終始献身的にサポートし、旅の成功を大きく後押しした。ちなみにジャイアント社を創業した劉金標（King Liu）氏（平成29年に旭日中綬章を受章）は、日本各地の自治体と連携した自転車を軸とする地域振興を精力的に推進するとともに、財団法人自転車新文化基金会の理事長として自転車の社会的価値向上に尽力し、日台双方から自転車利用と地域振興の両立を支えてきた。東日本大震災の発災当初には、自転車・用品の寄贈、義援金・物資支援、販売網を活用した点検・修理支援を行い、その後の復興期には東北のサイクルツーリズム発信やイベント協力を通じて交流・来訪の促進にも貢献してきた。

本稿では、今回の環島での筆者の体験を、雑感を交えつつ綴っていく。こういった文章は書き慣れておらず、拙い点もあるが、あらかじめご容赦いただきたい。

2. 環島日記

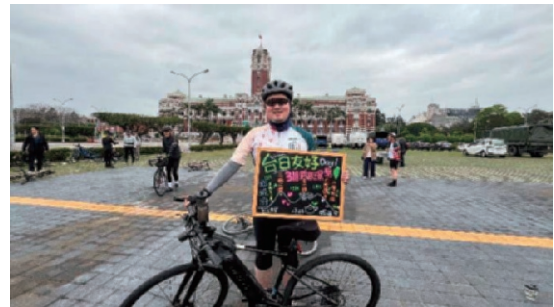
0日目（出発前日）

ジャイアントの店舗で、9日間の相棒となる自転車のフィッティングと試乗を行う。電動アシスト車は初体験のため、操作も含めてレクチャーを受ける。扱いにはまだ慣れないが、想像以上にアシストが効くとわかりひと安心。緊張のせいで、その夜はよく眠れなかった。

1日目（台北から礁溪）

あいにくの曇り空で肌寒い朝、バックパックを背負っ

て總統府前広場へ向かう。9日間を共にする仲間と合流し、ぎこちないあいさつを交わして自分の車体へ。總統府を背景に記念撮影（この写真がのちにNHKニュースのサムネイルに使われた）やウォーミングアップで気持ちを整える。出発式では片山代表ご夫妻から励ましの言葉をいただき、気が引き締まる。



写真① 1日目：總統府前から出発

式後、ジャイアント・アドベンチャー社随行スタッフの先導で隊列を組み台北市内を南下。昼食まではジャイアント社のフィービー・リュウCEOが共にライドしてくださった。新北市に入り、新店溪沿いを走る。休憩を挟み、宜蘭へ向かう「台9線」の山道へ入る。長い上りが続くが、電動アシストが威力を発揮し、平地に近い感覚で進めた。時折霧雨が降り、濡れた路面は滑りやすい。特に下りは速度を落とし、安全最優先で走る。

茶どころの坪林で昼食をとり、再び宜蘭県境に向けて長い上りへ。環島でも有数の難所とされる区間で、アシストを最強モードにして乗り切る。峠に立つと、眼下に宜蘭の海岸線が広がる。ここからは「九彎十八拐」と呼ばれる急勾配の九十九折。ヘアピンが続くため、いっそう慎重に下る。山を抜けると温泉地の礁溪に到着。初日の宿だ。



写真② 1日目：台北から宜蘭へ抜ける「九彎十八拐」

台北と宜蘭は、2006年開通の雪山トンネルにより、今は高速バスで1時間足らず。開通前はこの「台9線」が主ルートだったことを思うと、難工事に携わった人々の努力に頭が下がる。

夕食は宜蘭名物の甕窯鶏（鶏を一羽丸ごと窯でじっくり焼いたもの）をいただく。席はくじ引きで、初対面どうしの自己紹介で盛り上がる。ホテルには温泉があり、冷えた体を温めて疲れを癒やし、翌日に備えた。

2日目（礁溪から瑞穂）

環島の朝は早い。朝食後、6時40分に集合・出発。まずは礁溪駅から花蓮駅まで列車で移動した。宜蘭と花蓮を結ぶ幹線の「蘇花公路」は、2024年の地震などで被災し安全が確保できないためである。絶景区間を電車で通過するのは残念だが、安全第一だ。一日も早い復旧を願う。乗車したのは各駅停車の区間車で、指定車両には自転車折りたたみを持ち込めた、いわゆるサイクル・トレインである。約2時間の移動は、美しい車窓と



写真③ 2日目：礁溪駅から花蓮まで鉄道で移動

時折訪れる眠気のせいであっという間だった。

花蓮駅に到着し、瑞穂に向けて走り出す。この日も雨が降ったりやんだりの不安定な天候だった。途中、吉安慶修院に立ち寄る。1917年に日本人移民が建立し、四国八十八箇所を模した石仏が並ぶ寺で、ここだけで「お遍路」ができる。境内には日本統治時代の写真も掲示され、日本とのつながりを強く感じた。その後は時折土砂降りに見舞われつつ南下を続ける。

昼食は黄金シジミで知られる店でシジミ料理をいただく。再び走り出すと、使い捨ての雨合羽が配られた。以降は、2025年9月の馬太鞍溪堰止湖決壊による大規模洪水の被災地（光復郷）で、復興工事のセメントが衣服に付着すると落ちにくいと、着用が必須だった。馬太鞍溪の橋は災害当時に流失し、2026年1月に架け替えられたというが、被害の爪痕は大きい。光復郷には当時、シャベルを手にしたボランティアが台湾各地から集まり復旧に尽力した。日本政府も2025年10月に湛水池の水位をリアルタイム観測する機器を提供した。困ったときに支え合う日台の関係が、これからも続いてほしい。

途中休憩を挟み、花蓮県南部の瑞穂のホテルに到着。温泉で疲れを癒やし、翌日に備えて休んだ。

3日目（瑞穂から台東）

環島中は出発が早く（この日も7時15分）、準備の時間を確保するため自然と早寝早起きのリズムに切り替わる。真昼の強い日差しや交通量の増加を避けられ、朝の涼しさを活かして距離を稼げる利点が多い。普段の夜更かしから離れ、睡眠と食事のサイクルが整い、回復も早まり、心身の調子が安定した。



写真④ 3日目：花蓮県の北回帰線記念碑

ホテルから少し走ると北回帰線の記念碑に到着する。ここは台湾において嘉義と並ぶ北回帰線記念碑で、記念

撮影を済ませて先へ進む。ここまでが亜熱帯、ここから先は熱帯だ。以降は、中央山脈と海岸山脈に挟まれた花東縦谷の田園風景の中を南下する。米どころとして名高く、原住民の多い地域で、道沿いにはその意匠のイラストやオブジェが点在する。玉里を過ぎ、廃線跡の自転車道に入る。秀姑巒溪にかかる橋の中央で停車すると、そこはユーラシアプレートとフィリピン海プレートの境界を示す地点で、私のような地理好きにはたまらない眺めだ。フィリピン海プレートのほうへ再び走り出し、台東県へ入る。



写真⑤ 3日目：休憩スポットの猫



写真⑥ 3日目：台東県にて田んぼを貫く一直線を快走

昼食は池上で、御用米としても知られる「池上米」の弁当をいただく。続いて「伯朗大道」へ。田んぼを貫く一直線はやはり走って気持ちがよい。先には「金城武の木」と呼ばれる一本木が立っている。この木は日本の樹医の診療を受けながら大切に守られているという。さらに南下し、鹿野高台の鹿野神社に立ち寄る。日本統治時代の神社は戦後に一度失われたが再建され、美しく整備されている。そこからこの日の目的地・台東へ。台東県政府の方々や子どもたちに温かく迎えられ、名物の釈迦頭（私の台湾で一番好きな果物）も振る舞っていただいた。出発直前に元宵節の「炸寒单」（人が扮する寒单爺に爆竹を浴びせ厄除や商売繁盛を祈る、台東の伝統的祭

り）を見に来たばかりだったが、早々の再訪となった。

4日目（台東から枋寮）

ここからはジャイアント社のトニー・ロー元CEO夫妻と一緒にライドしてくださった（8日目の新竹まで）。早朝ホテルを発ち、南廻公路を南下する。沿道には釈迦頭の看板や果樹園が点在し、走りながら土地の名産が自然と頭に入るのが自転車旅の醍醐味だ。左手には東海岸の青が広がり、視界が開けるたびに思わず停車してシャッターを切る。海沿いとはいえアップダウンは多く、登りでアシストを強め、平地で抑えるリズムで脚を温存した。



写真⑦ 4日目：台東の海岸線に沿って走る

やがて介達国民小学（台東県金峰郷）に到着。校門では先生方と子どもたちが歌で迎えてくれた。突然現れたサイクリストの一团にも物怖じせず、元気いっぱいに交流してくれる。日本統治期に遡る歴史を持つ学校で、生徒の多くはパイワン族やアミ族。校内は伝統意匠で彩られ、文化継承のためのカリキュラムも整う。先生の紹介の後に披露された民族舞踊は息が合い、受賞歴も納得の見事さだった。別れ際にはハイタッチで見送られ、胸の内在が温かくなる。



写真⑧ 4日目：台東県・介達国小の生徒たちと

海岸線から県境へ向かう分岐のレストランで昼食をとる。集合までの間、峠から下ってきた逆回りの環島グループと出会い、東の間の交流を持った。旅の間、台湾人・外国人を問わず多くの環島仲間に出会い、「台湾人なら一度は環島を」という言葉が文化として根づきつつあるのを実感した。

午後はこの旅最大の難所・寿峠へ。海拔ほぼゼロから一気に約460メートルまで登る厳しい区間で、私の体力ではロードバイクなら途中離脱が濃厚だったはずだ。電動アシストを最大にし、標高を稼ぐ。頂上が屏東県との境で、ひと息ついてから慎重に下る。視界の先に台湾海峡の青が現れた瞬間、東海岸から西海岸へと舞台が切り替わったことをはっきりと実感した。



写真⑨ 4日目：台東・屏東県境にある寿峠の最高点にて

そのまま屏東の海沿いを走り、この日の宿泊地・枋寮へ。南廻線の起終点でもある町だ。東海岸の雄大さに別れを告げ、西海岸の空気へと入れ替わる節目の一日となった。

5日目（枋寮から高雄・高雄でのイベント「日台友好の夕べ」）

この日は夜のイベントに間に合う行程で、距離は短め。

屏東のマンゴー畑を眺めつつ、朝から強い日差しの中を進む。途中、潮州の古民家カフェ「三平珈琲」に立ち寄り、日台夫婦が手がける心地よい空間で軽食とコーヒーをいただく。ここから竹田駅までは屏東大学の学長を筆頭とした先生方が一緒にライドしてくださった。竹田駅では地元政府の皆さんに歓迎していただく（名物の醤油アイスが美味しい）。四半世紀にわたり地域に支えられてきた日本語図書館「池上一郎博士文庫」を見学し、3月閉館前に訪ねることができて本当に良かったと感じた。

高雄へ向かう道中は容赦ない日差しが続いたが、高架道路の陰は風が抜けて走りやすい。高屏大橋を渡って高雄市に入ると、市警のパトカーと白バイが先導・護衛に付く思わぬ展開となり、一同驚く。交通量の多い区間を安全に走行でき、台南市境まで丁寧にサポートしてくださった高雄市警、とりわけ並走してくださった警察官の皆さんに深く感謝する。



写真⑩ 5日目：高雄市警のパトカーが並走

市内では紅毛港保安堂に参拝。旧日本海軍の軍艦と軍人を祀る道教の廟で、安倍晋三元首相の銅像もある。到着時刻は3月11日13時46分（日本時間14時46分）で、全員で黙とうを捧げ、犠牲者の冥福と被災地の復興を祈る。昼食は日台夫婦が営む「樋口おにぎり」のお弁当。台湾料理も大好きだが、日本の味で心が落ち着いた。その後、市街地へ入りホテルにチェックインした。

夜はホテル・ニッコー高雄で「感謝台湾 日台友好の夕べ」を開催。主催者として台湾への感謝を伝える趣旨で行い、各界の要人を含む約150名にご参加いただいた。日本台湾交流協会高雄事務所の奥正史所長、頼瑞隆・立

法委員、屏東県の黄国栄・副県長、米国在台協会高雄事務所のニール・ギブソン所長にご挨拶をいただき、日本台湾交流協会台北事務所の高羽副代表が乾杯の音頭を取った。伊藤佳代さん、志甫一成さん、馬場克樹さん、屏東県満州民謡協進会と河合一家の皆さんによる多彩なステージで会場が一体となり、文化交流の輪が広がった。台湾の皆さんに感謝を届けるという目的は果たされたのではないかしら、同時に日台友好を願う思いが相互に確かめられた。ちなみにここでは驚きの再会があったが、それは6日目とところで後述する。走行と交流の双方で充実した一日となり、翌日に向けて英気を養った。



写真⑪ 5日目：高雄での「感謝台湾 日台友好のタベ」

6日目（高雄から嘉義）

環島も振り返りを過ぎたこの日が一番の長距離ライド。台南までは郭国文・立法委員が同行。高雄市内は朝のラッシュで混雑していたが、市警の先導・護衛のおかげで安全に通過できた。改めて高雄のスケールの大きさを実感する。やがて市境を越え、台南市政府へ向かう途中の交差点でチェーンが外れる初トラブル。ジャイアント・アドベンチャー社のスタッフに自転車を託し、私は小走りで市庁舎へ向かった。到着すると黄偉哲・台南市長が直々に迎えてくださった。学んだ台湾語で市長に自己紹介することもできた。温かな言葉とともに台南名物のフルーツやご当地ハンバーガーを振る舞っていただいた。団長の一青妙さんは台南市の親善大使でもある。なお、台南には私と同名の「大内」という地名もあるそうで、いつか必ず訪れたい。表敬後、スタッフが修理を終えてくれた車体と合流し、無事に再スタートした。



写真⑫ 6日目：台南市政府を表敬訪問

表敬の後、台南で民宿を営む皆さんが嘉義県境手前の後壁駅まで同行してくれた。その中には、前日に思いがけず再会した台南のとある方の姿もあった。2025年の大晦日、台南の寺社や教会で除夜の鐘をつく恒例行事に参加した際、Facebookで見つけたあるお廟の告知が縁でお世話になり、町の見どころを教わりつつ鐘も突かせてもらった。その方は台南で民宿の経営もしており、この日はサポートカーを担当。年越しのご縁がライドにつながり、胸が熱くなった。

この日からは向かい風（東北季風）が強まり、平地でもアシストを全開にして進む。再び北回歸線を越えて熱帯から亜熱帯へ戻り、嘉義市に到着した頃にはすっかり日が落ちていた。夕食は自由行動だったが、疲労困憊のためホテル前の餃子で済ませ、早々に就寝した。

7日目（嘉義から台中）

朝から日差しと向かい風が強い。嘉義県を北上し、大林の旧製糖工場で休憩。そのまま雲林県に入り、濁水溪に架かる大橋を渡って彰化県へ。台湾を南北に分ける目安として濁水溪が用いられることが多く、日本台湾交流協会の管轄も同河川を境に北（台北事務所）・南（高雄事務所）で分かれている。

昼食後しばらく走ると、清代から続く埔塩順澤宮に到着。ここは帽子で名の知られた宮だ。2019年、ノルウェーのトライアスロン選手が東京でこの宮の帽子を拾い、それをかぶって大会に出場して優勝したことから、「神帽」と呼ばれるようになったという。話には聞いていたが、まさか実際に参拝できるとは思わず、宮の方の説明でここがその順澤宮だと気づいて驚いた。仲間の多くが参拝してお賽銭を納め、帽子を授かって記念撮影。後日、その様子が順澤宮のFacebookにも掲載された。



写真⑬ 7日目：彰化県・順澤宮にて

彰化から台中市域に入ると、車とバイクの量が一気に増える。交通の波を縫うように慎重に走り、この日の宿に無事到着した。

8日目（台中から新竹）

台中はジャイアント社の本社所在地。まず本社を表敬し、温かい歓迎を受ける。創業者・劉金標氏（今年逝去）の足跡をたどる展示を拝見し、その志にあらためて触れた。のちに市内を北上し、苗栗県境を越える道中で、媽祖繞境で知られる大甲鎮瀾宮や白沙屯拱天宮の前を通過。白沙屯の繞境には2025年に一日だけ参加したことがあり、台湾の伝統文化の活力を思い出す。昼食はマクドナルドだったが、店がわざわざ我々のための歓迎ポスターを用意してくれてうれしかった。



写真⑭ 8日目：苗栗県のマクドナルドでの歓迎ポスター

午後は海沿いルートで苗栗から新竹へ。ここは台湾でも屈指の強風地帯で（日本でも有名な新竹のビーフンは

この強風によって美味しく作られる）、この日も東北季風が容赦なく吹き付ける。登坂だけでなく平地でも脚を削られるため、電動アシストを高めに設定して粘り強く前進。無事に新竹へ到着した。

夜は全員で囲む最後の夕食。この数日の思い出話に花が咲く中、一人一人が感想発表。そしてここまでの記録動画がサプライズ上映された。ジャイアント・アドベンチャーのスタッフが夜通し編集してくれたとのこと。同行サポートに加えて動画まで用意してくださる献身ぶりに、ただただ頭が下がった。

9日目（新竹から台北）

最終日。名残惜しさを胸に最後の準備体操を済ませ、一路台北へ。新竹から関西（新竹県）・桃園へと続く丘陵地帯は客家人の多いエリアで、伝統市場の中を抜ける区間もあり、町並みの趣が強く印象に残った。時間をつくってあらためてゆっくり訪ねたい。



写真⑮ 9日目：「環島」達成も間近

台北郊外の行楽地として知られる石門ダムは迫力ある景観を経て、大漢溪沿いの道へ。途中の大溪老街で昼食休憩をとる。川沿いの吊り橋を渡り、階段を上った高台の旧市街で名物の豆干を味わう。特製ジャージに気づいた人々から声をかけられ、温かさに励まされた。



写真⑯ 9日目：新北市の川沿いをラストスパート

大溪を出発し、台北まで続く川沿いの自転車道をひた走る。鶯歌（焼き物の町）からは台湾のサイクリストグループが台北市境まで伴走してくれた。遠くに台北101が見えた瞬間、帰ってきた実感と、旅の終わりの寂しさが同時にこみ上げる。淡水河の河畔の休憩スポットでは、彼らのバンド演奏がサプライズで我々を出迎え、日本の名曲も披露してくれた。橋を渡って新北市から台北市へ入り、往路と同じ道をたどりながら「もう終わっちゃうね」と言葉を交わすうちに、ゴールの中正記念堂に到着。友人も出迎えてくれ、その場で写真入りの完走証が一人ひとりに手渡され、記念撮影を行った。9日間の相棒の自転車に別れを告げ、初日はぎこちなかった仲間たちとも名残を惜しみつつ挨拶を交わす。総統府前を出発したあの日から、気づけばあっという間の9日間だった。



写真⑰ 9日目：ゴールの中正記念堂前にて

3. おわりに

9日間にわたる環島の旅では、東海岸から西海岸まで、山や海、都市や農村など、台湾という土地が持つ多彩な表情に触れることができた。毎日懸命にペダルを漕ぎ続

けた時間は濃密で、長い旅であったはずなのに、振り返ればあっという間の9日間であったように感じる。

今回の旅は、単なる自転車での走行にとどまるものではなかった。高雄で開催した「感謝台湾 日台友好の夕べ」、台東县政府・台南市政府への表敬訪問、台東の介達小学校への訪問など、多くの方々と直接交流する機会に恵まれた。また、それ以外の場面でも、オリジナルのサイクルウェアの背中に大きく記した「感謝台湾」の文字を通じ、日本人が台湾に抱く感謝の気持ちを少しでも届けることができたのではないと思う。そうした意味で、「台湾の人々に感謝を伝える」という今回の目的は、確かに果たすことができたと感じている。

しかしその一方で、私たちの方こそ、台湾の皆さまから数え切れないほどの温かさをいただいた。イベント会場で掛けていただいた励ましの言葉、沿道から聞こえてきた「加油！（頑張れ!）」という声援、そして旅を陰ながら支えてくださった多くの方々のご厚意——その一つひとつが、疲れた身体と心を何度も前へ押し出してくれた。

台湾には、「台湾で最も美しい風景は人である」という言葉がある。旅を終えた今、その言葉に誇張はまったくないと心から実感している。もちろん、壮大な自然や歴史ある街並み、美しい文化的景観も台湾の大きな魅力である。しかし何よりも心に残ったのは、そこで出会った人々の優しさであった。

この旅は、本来、私たちが台湾の皆さまへ感謝を伝えるための旅であった。だが旅を重ねるほどに、むしろ私自身の台湾への感謝の思いの方が、さらに大きく膨らんでいったように思う。それもまた、「善の循環」の一つなのだろう。日本と台湾の友情は、自転車のペダルのように、止まることなく前へ前へと回り続け、その輪をさらに大きく広げていくに違いない。

私自身も、今回の経験を胸に刻み、これからも公私にわたり、日台の「善の循環」のペダルを漕ぎ続けていきたい。そして、日本と台湾のより良い未来のために、微力ながら力を尽くしていきたいと思う。

参考：台湾環島日記－参加者による記録集

<https://www.facebook.com/gogohuandao/>

参考：震災から15年 支援への感謝を伝える台湾一周サイクリングの旅（野嶋剛）

<https://www.cyclowired.jp/news/node/392345>（企画者視点からの文章です）